

# 初級及び準中級中国語における助詞「了」の 教授法についての一提案

— 準中級学習者の作文に見られた誤用の分析を中心に —

羅 華<sup>1</sup>

## 要旨

助詞「了」の学習は、中国語の発音、文字及び基礎文法知識を中心に学習する入門段階を経た後の初級段階で導入し、学習するが、学習者にとって習得が難しい文法項目の一つである。その理由は主に以下の二点である。まず、「了」は文法的意味と統語構造に基づき二つに分けられ、一つは動詞の後につける動態助詞<sup>註1</sup>（通称「了<sub>1</sub>」）で、動作の実現・完了を表す。もう一つは文末につける語気助詞（通称「了<sub>2</sub>」）で、状況の変化や新しい事態の発生、もしくは話し手の事柄に対する確認の気持ちを表す。これらの基本文法的意味に加え、「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」にそれぞれ細かい文法的意味があり、学習者にとって情報量が多く、理解しにくい。

「了」をはじめて導入する段階においては、学習者に提示される例文が主に過去に発生したことを表す文であるため、学習者に「了」は中国語の過去形マークだという誤った印象を与えてしまう。その学習者の母語または第一外国語がテンスのある言語の場合、母語による負の影響、つまり、負の転移が生じやすく、「了」を使うべきでない箇所に使い、逆に使うべき場合に使わない現象が多く見られる。

本稿では中国語の初級段階を終え、準中級コースに入った学習者の作文から収集した「了」の誤用例を分析し、その誤用に至る原因を突き止めることを試みた。また、「了」の文法的意味を再整理し、効果的な教授法を提案する。

**【キーワード】** 動作の実現 状況の変化 確認の語気 情報伝達の焦点 誤用分析

## はじめに

多くの文法書及び教材（守屋, 1993; 輿水, 1985; 呂, 1995; 卢, 1996; 房, 2008）は、「了」は一般的に「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」に分けられ、「了<sub>1</sub>」は動詞の後に置かれ、「了<sub>2</sub>」は文末に用いられると説明している。守屋（1993）は、「了<sub>1</sub>」は動作・行為の完成・実現を表し、「了<sub>2</sub>」は主に「状況が変化した、新事態が発生したことを確認した」というムードを表すとし、房（2008）は、「了<sub>1</sub>」は動作の完成・実現を表し、「了<sub>2</sub>」は主に発話時の状況に変化が生じた表すと同時に、その変化を確認したという語気を表すと述べている。また、語気を表すことを言及せず、「了<sub>2</sub>」が新しい事態の発生、変化を表すと説明する文法書（三宅, 2012; 荒川, 2003）もある。

両者の「了」に関する説明自体は問題がないが、教員は中国語にはテンスがないという背景知識を念頭に置き、折に触れて学習者に説明・注意喚起をする必要がある。なぜなら、

<sup>1</sup> 立命館アジア太平洋大学（APU）嘱託講師

e-mail:luohua@apu.ac.jp

「了<sub>1</sub>」か「了<sub>2</sub>」を問わず、「了」が使われた文が表している出来事の多くは過去のことであるため、学習者は「了」が中国語の過去形を成す文法条件だという誤った認識を持ってしまうからである。また、「了」の文法的意味は複雑であるため、その学習を二、三回で終わらせることが現実的ではなく、何回かに分けて導入されるのが一般的である。したがって、「了」の学習の初級段階当初に「了」が中国語の過去形マークだという誤認識が一旦なされると、「了」全体の学習に影を落としてしまい、学習者が自信をなくす要因の一つにもなる。また、「了」の習得を妨げる原因はほかにもあると予想され、学習者が産出した誤文を分析し、その原因及び対策を考える「了」の誤用分析も多くなされた。例えば、郭（2001）は初級と中級レベルの日本人学習者の作文と会話によく見られる「了」に関する誤文を集め、学習者の母語及び英語の影響の角度から誤用の原因を分析した。吳（2002）は、出来事の時間軸におけるつながりの角度から日本人学習者の「了<sub>1</sub>」の欠落に対して分析を行った。盧（2006）は日本人学習者に見られた「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」<sup>注2</sup>の濫用と欠落の誤用例を集め、主に動詞の分類及び副詞との共起の角度から誤用の原因を分析した。王（2014）は、初級から準中級レベルの日本人を含む多国籍の中国語学習者を対象に「了」の使用についてのアンケート調査を実施し、学習者の「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」の習得状況に基づき「了」の教授順序及び具体的な教授法を提案した。上記の各研究はそれぞれ違う角度から「了」の誤用に至る原因を分析し、効果的な教授法の構築に貢献する知見が得られた。しかし、これらの先行研究は言葉の最も重要な役割の一つである、自分の伝えたいことを正確に相手に伝えるという、いわゆる情報伝達の焦点の角度から分析を行っていない。また、「了」の学習を学習者の学習過程全体に置き、「了」の誤用につながる他の文法項目との関連性及び回避策についても十分な議論がなされていない。したがって、本稿ではこの2点を中心に、『新实用漢語課本』を用いて中国語を学んでいる学習者の作文における「了」の誤用例を分析し、より効果的な教授法を提案したい。

### 1. 『新实用漢語課本』（第1冊～第3冊）における「了」の内容及び学生の習得度

『新实用漢語課本』は全部で6冊あるが、本校の中国語の履修科目（レベルⅠ～レベルⅣ）<sup>注3</sup>は第1冊から第3冊まで使用する。『新实用漢語課本』では「了」に関する学習は初級段階から始まり、準中級の学習段階まで続いているが、準中級レベルの中間学習段階に挙げた項目は初級レベルの終了前の学習段階に挙げた項目と同一内容と見なしてもよいものであるため、「了」の基本的な文法的意味は初級段階ではほぼ完了していると言える。

だが、「了」の学習を終えた学生の「了」についての習得度はまだ低い。筆者は2019年4月から7月までの間に初級中国語（中国語Ⅱ）の履修科目を終えて準中級コース（中国語Ⅲ）に進級した学生39人<sup>注4</sup>に週に3回、80字程度の日記を書くようにと課題<sup>注5</sup>を出し、学生たちの作文から「了」の誤用文を223文集めることができ、その誤用の原因を分析してみた。分析の結果は表1が示しているとおり、誤用の種類は概ね8種類に分類することができ、そのうち最も多かった誤用は「了<sub>1</sub>」に関する誤用であったということである。前述のように、「了」の学習は「了<sub>1</sub>」から始まるが、初級・準中級における「了」全体の学習が終わった時点で「了<sub>1</sub>」に関する誤用が最も多いことは、「了」に対する理解度が最初から低く、学習者は「了」の文法的意味についてきちんと理解せず学習を進めてい

た様子が窺える。このことが「了」全体の習得度が高くない結果につながっていると言えよう。

表1 準中級学習者の作文に見られた「了」に関する誤用

	誤用の種類	データの個数	割合
1	「了 <sub>1</sub> 」の欠落と誤用	86	38.6%
2	「了 <sub>1</sub> 」及び「了 <sub>2</sub> 」の濫用	57	25.6%
3	変化を表さない文に「了 <sub>2</sub> 」を使用	36	16.1%
4	変化を表す文に「了 <sub>2</sub> 」が欠落	14	6.3%
5	連動式文と兼語文における「了 <sub>1</sub> 」の誤用	12	5.4%
6	“是……的”文との混同	10	4.5%
7	状態の持続を表すのに必要な「了 <sub>2</sub> 」の不使用	5	2.2%
8	否定文における間違い	3	1.3%

## 2. 学習者の誤用から見た教材内容の不足点及び対策<sup>注6</sup>

### 2-1 「了<sub>1</sub>」の欠落と誤用の詳細

「了<sub>1</sub>」の誤用はまた二種類に細分化することができる。一つは「了<sub>1</sub>」を用いるべきだが、用いなかった誤用は全体の24%を占めていた。もう一つは「了<sub>1</sub>」を文に使用したものの、「了」の文法の構造的特徴を把握しきれないため、動詞の後でなく文末に置き、「了<sub>2</sub>」と混同した誤用であり、全体の76%を占めていた。

#### 2-1-1 「了<sub>1</sub>」を使用すべきだが、使用しなかった誤用

「了<sub>1</sub>」は初級レベルの前半学習段階における学習項目だが、準中級レベルの学習に進んだ学習者は「了<sub>1</sub>」を使用すべき箇所を使用しなかった誤用が多い。その原因は二つ考えられる。一つは「了<sub>1</sub>」の文法的意味が十分理解できていないという点である。もう一つは「了<sub>1</sub>」を学習する段階はほかの学習項目がまだ少ないため、その後で文法的知識も語彙数も多く学習した準中級レベルの学習者は、「了<sub>1</sub>」の後に学習した項目と「了<sub>1</sub>」の共起についての認識が薄いということである。

(1) \*今日はTA課,我学( )很多生词。

今日はTA授業で、私はたくさんの新しい単語を習った。

(2) \*我今天下午又去看( )看别的相声演员的表演。

今日の午後また別の落語家の公演を少し見に行った。

(3) \*今天我回我的故乡冲绳。我见到( )爸爸妈妈,三个妹妹和外公。

今日私は故郷の沖縄に帰った。私は両親、3人の妹とおじいさんに会えた。

(1)～(3)の文は、いずれも( )のところに「了<sub>1</sub>」を使用すべきである。(1)は教材に挙げられた例文とまったく同じ構造であるが、学習者が文を産出する際、「了<sub>1</sub>」を使わなかった理由は「了<sub>1</sub>」の働きを十分理解できていなかったためだと考えられる。また、その動作(行為)が動作のどの段階にあるかを考えなかったことも考えられる。テンスがある言語は過去形や未来形、完了形など動詞の形態の変化によって表されるため、学習者は単語を習う時からその形態の変化を自然に意識する。したがって、文を産出する時に動詞のどんな形態を使うかということを常に考える。それに対して、中国語はテンスがなく動詞と形容詞の形態上の変化がないため、初級レベルの前半学習段階にいる学習者は文を容易に産出できると感じることも多い。“我把车开到停车场(私は車を駐車場まで移動させる)。”という文は準中級の前半学習段階にいる学習者が「把」構文の練習のため作った文である。「了<sub>1</sub>」の誤用と直接関係がないが、学習者が動作の内的な時間構造を意識していない例だと言える。「开」は「運転する」という動作のどの段階にあるかがこの文だけでは判断できないため不自然に感じる。自然な文にするには、動作がその動作のどの段階にあるかを明確にする言葉を用いなければならない。例えば、“我会把车开到停车场”、“我每天把车开到停车场”、“我把车开到停车场了”などである。

三宅(2012)は、「アスペクトとは、動詞の表す動作の始まりから終わりまでの過程で、『進行』、『完了』など、動作がどの段階にあるかを示す文法形式のことである」と述べている。中国語のアスペクトは、アスペクト助詞のほか、時間を表す名詞や副詞、助動詞などさまざまな形で表されている。アスペクトの概念は、「了」の学習の開始時に学習者に紹介し、中国語にはテンスがないため過去形という考え方が中国語に通用しないということ意識させることが必要である。(1)の非文性は、「学」という動作がすでに実現したということ意識しなかったためと言えよう。一方、(2)と(3)の文は「了<sub>1</sub>」を導入する段階での未習項目が使用されていたため、「了<sub>1</sub>」の導入段階だけの知識ではカバーできない誤用である。したがって、教員は新しい文法項目を教えるたびにその文法項目に「了」を使用するかどうかを考え、使用するならどのような注意点があるかを、例文を用いて学習者に提示する必要がある。(2)の「看看」は動詞の重ね型で、少ない動作量もしくは試す気持ちを表す。この動詞の重ね型の学習は「了<sub>1</sub>」の後に来ているだけでなく、その時点では「AA」(看看)、「A—A」(看一看)と「ABAB」(学习学习)の三つの形式のみ学習者に提示している。「A了A」(看了看)の形式は準中級レベルの離合詞の項目で少し触れる。(2)の文を書いた学生は落語を見に行ったが、公演のすべてではなく一部だけ見たという意味を表そうとして、動詞の重ね型の表現を選んだという可能性があり、「見る」という動作が実現したが、「A了A」の形式を知らないため、そのまま「AA」の形を使用してしまい、「了<sub>1</sub>」が欠落する文になったと考えられる。

(3)の文は「见到」の後に「了<sub>1</sub>」をつけるべきだが、学生が「了」を使用しなかった理由として、「见到」は一つの動詞でなく、動詞「见」と結果補語「到」の組み合わせだと考え、「了」をつけるかつけないかと迷っていた可能性がある。本校の中国語の履修科目では結果補語の学習は初級レベルの中間学習段階から始まる。前述の動詞の重ね型と同じように、学習では新出文法項目にフォーカスされ、「了」が含まれている例文が出されているものの、「了」の使用について特に言及されていない。したがって、結果補語を学

習する時、結果補語と前の動詞の連結が強く、「了<sub>1</sub>」を使用する際に結果補語の後につけるということが学生に提示されるべきである。また、前半の「今天我回我的故乡冲绳」の文末に「了<sub>2</sub>」を用いて新事態の発生・変化を表すべきである。

### 2-1-2 「了<sub>1</sub>」を動詞の後につけるべきだが、「了<sub>2</sub>」と混同した誤用

2-1-1の誤用の主な原因は動作がその動作のどの段階にあるかと考慮されなかったためだが、動作が実現したためアスペクトを表す「了<sub>1</sub>」を使うべきだと認識していても、文末に置く「了<sub>2</sub>」に対する認識が正しくないと非文になる確率が依然として高い。

(4) \*今天我去( )一个有名的餐厅了。今日有名なレストランに行った。

(4)の文は( )のところに「了<sub>1</sub>」を置き、動作の実現を表すべきだが、文末に「了」を置いたため、「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」の混同による誤用である。「了<sub>2</sub>」は変化・新しい事態の出現を表すのに使われるため、これらの文に使われると不自然である。

なぜ不自然なのか。劉(1992)は平叙文の焦点がいつも新しい情報の中にあるが、すべての新しい情報がみな焦点であるというわけではないと指摘し、中心語より限定語と状況語の方が焦点になりやすいと述べている。「了<sub>2</sub>」は変化もしくは新しい事態の出現を表すため、「了<sub>2</sub>」を用いた文の焦点、すなわち話し手が最も相手に伝えたいことは、変化もしくは新しい事態の出現である。(4)は「了<sub>2</sub>」を用いると、わたしが以前有名なレストランに行っていなかったが、今行ったという変化が相手に最も伝えたいことになる。しかし、「餐厅」の前に「一个有名的」という修飾語がかかっているため、話し手の最も伝えたい情報、いわゆる文の焦点は、「レストランに行った」か、それとも「行ったレストランが有名」かと定められなくなるため、文が不自然に感じる。したがって、焦点を定める必要があり、レストランに行くようになったという変化を最も伝えたいければ、“今天我去餐厅了”のように「了<sub>2</sub>」を用い、行ったレストランが有名なレストランだと最も伝えたいければ、“今天我去了”のように「了<sub>1</sub>」を用いなければならない。

## 2-2 動詞述語文における「了<sub>1</sub>」及び「了<sub>2</sub>」の濫用

2-1では、「了<sub>1</sub>」を使うべきだが使われなかった、または、使ったが文における位置を間違ったケースをまとめた。この節では、動詞述語文における「了<sub>1</sub>」及び「了<sub>2</sub>」の濫用の形態、原因及び対処法を考える。

学生の作文から収集した「了」に関する223文の誤用例の中で、濫用に当たる文は全部で57文あり、誤用全体の25.6%を占める。この57の文は、「了」を使用しない理由によってさらに、①情報伝達の焦点が動作そのものにある、②情報伝達の焦点が動詞の後に続く内容にある、③情報伝達の焦点が動作の行われた時間の説明にあるという三種類に細分化することができる。どの種類も誤用に至る根本的な原因は、学習者が情報伝達の焦点、つまり話し手が最も伝えたいことを把握できなかった点に尽きる。

## 2-2-1 情報伝達の焦点が動作そのものにあることを把握できず起きた誤用

この種の誤用は、日本語か英語で考えれば動作がすでに実現したため、「了」を用いて表現しようとした誤用だと言えよう。動作がその動作のどの段階にあるかを考慮しなかったため「了」を用いなかった誤用より一歩前進したと言えるが、過去にあったことならすべて「了」を用いるという誤った認識にさせないため、「了」の学習の早い段階で防止策を立てるべきである。

- (5) \*今天我和我朋友有期中考试子。 今日私と私の友達は中間テストがあった。  
(6) \*我每天八点要出门, 不过我今天八点才醒子。  
毎日8時に家を出ないといけませんが、今日8時になってようやく目が覚めた。

(5) と (6) の文における「了<sub>2</sub>」はいずれも不要であるが、どの文も過去に発生したことについて述べているため、日本語や英語の表現に引きずられ、どうしても過去が表せそうな言葉を入れたかったという学生の気持ちも理解できる。したがって、「了」の学習が始まると同時に、中国語にテンスという概念がなく、過去・現在・未来を表すには時間詞や文脈、動詞の後につけるアスペクト助詞などを用いることを学生に説明しておくことが大事である。「了<sub>1</sub>」は中国語のアスペクト助詞の一つで動作・状態の実現を表す。その動作・状態の実現は多くの場合、過去に行われたものだが、未来のある時点に実現する場合もあり、中国語の「了<sub>1</sub>」を英語や日本語の過去形と同一視してはいけないことを学生に意識させるべきである。一方、文末につける「了<sub>2</sub>」は語気助詞であり、主に発話時に状況に変化が生じたことを表す。劉・潘・故(2001)は、状況に変化が生じたケースを、①事柄が「未発生」から「発生」になることを表す、②動作が「未完了」から「完了」になることを表す、③動作が「進行」から「停止」になることを表す、④事物の性質・状態に変化が生じたことを表す、⑤願望、能力に変化が生じたことを表す、⑥時間、季節、年齢、数量の変化を表す、のように六種類に分けている<sup>注7</sup>。

「了<sub>2</sub>」は「了<sub>1</sub>」と同じように、多くの場合変化があったことを表すため、一見過去形のように見える。しかし、“我们就要毕业了(私たちはまもなく卒業する)。”のようにまもなく変化が起こることを表すにも使えるため学生の注意を喚起する必要がある。

言い換えれば、過去に発生したコト、またはある状態になったことに関しては「了」を使うべきかどうかを、情報伝達の焦点がどこにあるか、つまり話し手が最も伝えたいことが何かを把握する上で決める必要がある。動作の実現に焦点を当てるなら動詞の後に「了<sub>1</sub>」を置き、状況の変化に焦点を当てるなら語気助詞の「了<sub>2</sub>」を用いる。そうでなければ、(7)のようにたとえ過去にあったことでも「了」を使用しないということを学生に明示する必要がある。

- (7) \*他过去常常来我家玩儿子。 \*他过去常常来子我家玩儿。  
彼は昔よくうちに遊びに来ていた。

(7) の誤用に対し、過去に発生していても繰り返し行われた動作や行為を表す文に「了」

を用いてはいけないということは一般的な解釈であり、学習者もそのように教えられる。この説明は正しいが、表面的なことしか捉えていないため、このルールを覚えたとしても、(5) と (6) のように「常常」や「每天」など周期的に行われることを表す言葉が文に現れていない場合、学習者は「了」を使用する可能性が高い。(7) が間違っただ理由は、話し手の最も伝えたいこと、つまり情報の焦点は昔うちに遊びに来た頻度であり、遊びに来たという動作の実現でもなければ、遊びに来ない状態から遊びに来たという状態に変化したということでもないため、動作の実現を表す「了<sub>1</sub>」も、変化を表す「了<sub>2</sub>」も用いないわけである。

(5) では、動詞「有」が状態動詞であるため、「了」と一緒に使う時は動作の実現でなく変化を表す。中間試験は通常開講科目が設けられた当初からあるかないかが決められており、文脈から見ても、去年はなかったが、今年は行われるようになったという意味も見受けられない。そのため、「了<sub>2</sub>」は使用できないと判断できる。(6) の情報伝達の焦点は「目が覚める」という動作の実現でなく、目が覚めた時間が遅すぎたということのため「了」は使用できない。また、なぜ「才」は「了<sub>2</sub>」と共起しないが、「就」は「了<sub>2</sub>」と共起する（“我八点就起了” 私は8時の時すでに起きた）という問題に関しては、変化を表すという「了」の文法的意味に基づいた分析が学習者に理解しやすい。詳細は稿を改めたい。

## 2-2-2 情報伝達の焦点が述語動詞の目的語にあることを把握できず起きた誤用

動詞の後に「了」をつけることが動作の実現を表すということのみ学習すると、下記のような誤用が生まれる。

(8) \* 然后我建议子大家在别府的餐厅吃东西。

それから私は皆で別府のレストランで食事をするを提案した。

(8) の文では、「了」を使用することができない。「建议」（提案する）、「说」（言う）、「发现」（気づく）、「打算」（～つもりでいる）などのような動詞は、動詞句や主述フレーズを目的語にとることができる。その時、情報伝達の焦点は述語動詞の実現でなく、目的語であるフレーズが表す事柄にあるため、「了」の出番がない。(8) の情報伝達の焦点は、「提案」という行為でなく、皆で別府のレストランで食事をするという提案の内容にあるため、「建议」の後に「了」を使用してはいけない。したがって、教員は「了」を動詞の後に付けて動作の実現を表すことができるが、話し手が最も伝えたいことが動作の実現でなくその動作の後に続く具体的な内容である場合、動作が実現したとしても、「了」を用いないことを学習者に紹介しなければならない。一方、これらの動詞の目的語が動作の内容を表す語句でなく、一つの名詞もしくは名詞フレーズの場合、「了<sub>1</sub>」を使い動作の実現を表すことが可能であることも合わせて学生に説明することが必要であろう。“我发现一家很好吃的中国餐馆（とても美味しい中華料理屋さんを見つけた）。”はその一例である。

## 2-2-3 情報伝達の焦点が主節にある動作の時間にあることを把握できず起きた誤用

この節で取り上げる誤用は、主節の動作が行われた時間を説明する複文の従属節に「了」

を用いた誤用である。その原因は前述のとおり話し手が最も伝えたいことを見極められなかったことにある。

(9) \*我看子那部电影的时候我觉得友情和爱比金钱重要。

その映画を見ていた時、私は友情と愛がお金より大切だと思った。

映画は確かに「見た」という「動作の実現」だが、(9)の文に「了<sub>1</sub>」を使用することができない。学生の作文から収集できたこの種の誤用は3例だけだが、3例とも「了」は複文の主節における動作が行われた時間を詳しく説明する従属節に使用された。時間を説明する従属節において「どんな時」を詳しく説明することが情報伝達の焦点になるため、その従属節における動作の実現ではない。(9)の文で言うと、時間を表す従属節において書き手が最も伝えたい情報は「看(見る)」が実現したということではなく、主節の動作が行われた時間である。したがって、複文における時間を表す従属節である「……时候(～時)」の形に、「了」を使用しないことが一つのルールとして学生に提示することができよう。

### 2-3 変化を表さない文における「了<sub>2</sub>」の誤用

2-1及び2-2では主に「了<sub>1</sub>」に関する誤用及び原因をまとめたが、この節では「了<sub>2</sub>」に焦点を当てたい。「了<sub>2</sub>」のことを理解するキーワードが「変化」であるということであるが、今回学生の作文から収集できた223文の誤用文の中で3番目に多かった誤用が変化を表さない文の後に変化を表す「了<sub>2</sub>」をつけたものであり、36例ある。そのうち1例を除き、すべて形容詞述語文である。

(10) \*我吃印度咖喱。非常好吃子。私はインドカレーを食べた。とても美味しかった。

(10)は文の全体から変化が見受けられないため「了」が使えない。学習者は「了<sub>2</sub>」のキーワードが「変化」ということより先に、その状態が過去にあった(「美味しかった」)のに気を取られ、また「了」がよく過去のことに使われるため、「了」がイコール過去形マークという短絡的な考えになり、上記のような誤った文を産出したと考えられる。よって、「了<sub>2</sub>」の学習が始まる時から、「了<sub>2</sub>」のキーワードが変化だということを学習者に提示すべきである。『新実用漢語課本』は第15課から「了<sub>2</sub>」の学習をはじめますが、「変化」を言及するのが第24課であり、学習者への提示が遅すぎると言っても過言ではない。

### 2-4 変化を表す「了<sub>2</sub>」の欠落

2-3では、変化を表さない文に「了<sub>2</sub>」を使用した誤用について説明したが、一方、変化を表しているが、「了<sub>2</sub>」が使用されなかった誤用も目立つ。

(11) \*日本の年号从今天起就是令和( )。日本の年号は今日から令和だ。



(11) は日本の年号が平成から令和に変化したと表すため、文末に「了<sub>2</sub>」が必要になる。しかし、日本語で考えるとこの文は現在形でも言えるため、2-3でも言及したように、「了<sub>2</sub>」を文末につけるべきかどうかを判断する基準は、変化が見られるかどうかであることを学習者に繰り返して伝えたい。

## 2-5 「是……的」構文との混同

「是……的」構文は過去の出来事を表す時に使う構文で、動作が行われた時間、場所、方式、目的など個々の構成要素に焦点を当て、「了」のように動作の実現及び状況の変化を表さない。しかしながら「了」の使用場面が過去の出来事に多いため、学習者はしばしば「是……的」構文と「了」を混同する。

(12) \*虽然我想了七点起床, 但是我起床了八点半。 → 但是我是八点半起床的。  
7時に起きようと思っていたが、起きた時は8時半だった。

(12) の文は、文脈から見れば動作の実現に焦点を当てていないことが分かる。7時に起きたかったが、実際に起きた時刻は8時半であり、起きた時刻に焦点を置くべきである。「是……的」構文は必ず過去の出来事の個々の構成要素に焦点を当てるのに対して、「了」を使うのは動作の実現、または状況の変化を表したい時であるということを、「是……的」構文を学習する時に注意点として学習者に説明することが「是……的」構文と「了」の混同を防ぐ有効な方法であろう。

## 2-6 動作及び状態の持続を表す「了」の欠落

「了<sub>1</sub>」は動詞の後に置いて動作の実現を表し、「了<sub>2</sub>」は文末に置いて状況の変化を表すが、時量補語を伴う場合、どちらも動作か状態の持続を表すことになる。その時、持続している過程にトキが流れているという変化が内包されていると理解すれば良い。「了<sub>2</sub>」が使われた文で、動詞が持続動詞の場合、動作が開始されてから現在まで続いている期間を表し、瞬間動詞の場合、動詞が実現された後に残った状態が現在まで続いている期間を表す。一方、「了<sub>1</sub>」だけを使われた文で、動詞が持続動詞の場合、動作の開始から実現までの持続時間を表し、瞬間動詞で後続の文が続く場合、動作が実現された後に残った状態が過去のある時点に持続していた期間を表す。なお、一般的に「瞬間動詞+了<sub>1</sub>」と時量補語を含む文は後続文が続くか、もしくは「了<sub>2</sub>」を付着させてはじめて文全体を終わらせることができる。

『新实用汉语課本』では、持続を表す働きを明白に示す「了」が出てくるのは初級レベルの中間学習段階だが、その段階では「了」についての学習項目はなく、時量補語の学習項目として導入される。その前にも持続を表す「了」の例文が出ているが、いずれも時量補語の説明に用いられ、「了」の働きについては触れていない。つまり、動作または状態の持続を表すことが「了」の重要な働きの一つだが、『新实用汉语課本』では、それを時量補語の学習内容に分類している。「了」の学習難易度を下げるという考えがあったと思われるが、「了」の学習の系統性を損ね、学習者に不完全な認識をもたらす恐れがあり、

(13) のような誤用を生み出させる。

(13) \*我和他认识两年 ( ), 交情一直不错。

私は彼と知り合ってから2年経ったが、ずっと仲が良い。

「知り合う」ことは互いに簡単な自己紹介をした時点で実現し、その結果として「知り合った」という状態がずっと続いているわけであり、時量補語だけでなく持続を表す「了」が必要である。この種の誤用を避けるには、「了」の持続を表す働きについての項目を立て、「了」の学習内容に入れることが大切であろう。

一方、状態の持続は二種類ある。一つは持続性がない動作が実現した後に残った状態の持続であり、もう一つはある動作が実現されていない状態の持続である。後者は構造上の見目が「了」の否定文の説明に抵触しているためか、準中級レベル以前の学習では言及されないのが一般的である。“因为他一年多没有工作了（彼は一年以上仕事をしていないからだ）。”(BCCコーパス<sup>注8</sup>)はその一例である。

しかし、実際にまだ中級レベルに達していない学習者でも自分の生活について話す時にその必要性が出てくる。今回の223の誤用例の中でこの種の誤用が4例あった。

(14) \*因为好久没有吃寿司 ( ), 所以很好吃。

長い間お寿司を食べていなかったなので、とても美味しかった。

(14) は寿司を食べていない状態の持続を表すので、( ) のところに「了<sub>2</sub>」を置かなければならない。ただし、木村(2017)は「了<sub>2</sub>」が「話し手にとっての現在に関わって新たな状況が出現したという変化を表す」と指摘したように、発生していない状態の持続を表す「了<sub>2</sub>」を必要とするのは、発生していない状態が発話時に続く場合に限ることに留意しなければならない<sup>注9</sup>。

## 2-7 連動式文及び兼語文における「了<sub>1</sub>」の誤用

連動式文及び兼語文は一つの文に二つの動詞があるが、学習者が前の動詞に「了<sub>1</sub>」をつける傾向があることが今回の誤用分析で分かった。この種の誤用文は12文あり、うち11文は連動式文で、兼語文における誤用は1例のみだった。

(15) \*我跟三个朋友去子大分看 ( ) 两部电影。 / 我跟三个朋友去大分看了两部电影。

私は3人の友達と大分へ映画を二本見に行った。

(16) \*我的朋友让子我去他家。 / 我的朋友让我去了他家。

私の友達は私を彼の家に行かせてくれた。

この種の誤用に至る原因は、「了<sub>1</sub>」の文法的意味より連動式文と兼語文に対する理解にある。連動式文にある二つの動作が立て続けに行われるため、二つの動詞をその文中に限り一つの動詞グループと見なすことができる。したがって、本来動詞の後につけるも

のは動詞グループの後につけ、同様に動詞の前につけるもの、例えば否定を表す「没有」はグループの前につければ良い。それに対して、兼語文の「让」(させる)は後続の動詞がないと「させる」の意味にならないため、後続の動詞と一つの動詞グループとみなすこともできる。よって、連動式文と同様に、「了<sub>1</sub>」を使用する場合、後ろの動詞につけるべきである。ただし、連動式文も兼語文も文中にある二つの動詞を一つの動詞グループとみなすことが必須というわけではない。前の動作が実現した後に次の動作が始まったことを強調する時に両方の動詞とも<sup>注10</sup>「了<sub>1</sub>」をつけることができる。

## 2-8 「了」の否定文の誤用

「了」は動作の実現と状況の変化を表すため、実現していない、もしくは変化が見られない場合は「了」を使用することはできない。「了」の否定文に「没(有)」と「了」を共起させた誤用は、動作の実現及び状況の変化を表すという「了」の原点に対する理解が曖昧であることに起因していると判断できよう。

(17) \*我不会说英语,所以有时没听懂子。

私は英語ができないので、時々聞き取れなかった。

## 3. 初級及び準中級段階の学習を終えた学習者に必要な「了」の学習項目<sup>注11</sup>

この節では学習者の日記に現れていないが重要な文法的意味及び『新实用汉语课本』の第3冊まで言及されていないが、学習者の日常生活を表現する時に欠かせない文法的意味を説明する。

### 3-1 「V+了+目的語……」に連用修飾語がある場合、文を終わらせることができる。

ここでの「V+了+目的語……」における「……」は、文がまだ終わっていないことを示す。つまり、動詞が目的語を従えている場合、その目的語の前に連体修飾語がなければ、文をそのまま終わらせることができない。『新实用汉语课本』の第15課は、文を終わらせるのに目的語の前に修飾語をつけるか、またはさらなる情報を提供、つまり後続文を続かせるかという二つの方法を紹介している。本稿はその段階でも文末に「了」を置くことによって文を終わらせる方法を紹介すべきだと考える。またこの三つの方法のほか、動詞の前になんらかの修飾語があれば、文を終わらせることもできるということは、その段階で学習者にまだ教えないほうが良いが、教員が把握しておくことが大切である。“表哥当兵走的时候,我已经上了小学(いところが軍隊に入って(家を)出た時、私はすでに小学生になっていた)。”(BCCコーパス)という文は、動詞「上(学校に通う)」の前に「已经(すでに)」を用いて動作実現の時間を具体的に示しているため、「已经」は文の焦点になり、目的語の前に修飾語がなくても文全体の安定感を獲得しており、文を終わらせることができる。

### 3-2 未来のある時点における動作の実現

未来のある時点における動作の実現は、後続の動作や状態の実現の条件である。つまり、

動作の実現が未完成にもかかわらず、「了」を使用してその実現を仮定的に表現する。例えば“明天下午我买了本子去吃饭（明日ノートを買ったらご飯を食べに行く）。”という『新实用汉语课本』にある文は、中国語において動作実現の表現が、過去にだけでなく未来にも使用されるということを説明するのに最も効果的な例であるため、できるだけ早い段階で学習者にこのことを提示したい。

### 3-3 「sentence+了」の形で事柄に対する確認の語気を表す

「sentence+了」の形、いわゆる「了<sub>2</sub>」は多くの場合、状況の変化を表す。しかしながら、学者によって「了<sub>2</sub>」は単に変化を表すか、状況に変化が生じたということを確認することを表すか、また、単に語気を表すこともできるかとの見解が分かれている。荒川（2003）は「了<sub>2</sub>」が変化を表し、三宅（2012）は「了<sub>2</sub>」新しい事態の発生・変化を表すと述べているが、呂（1980）は「了<sub>2</sub>」は主に事態に変化が生じた、もしくはまもなく生じることを確認すると述べている。房（2008）は「了<sub>2</sub>」は主に発話時に事態に変化が生じたことと表し、それと同時に確認の語気を示すとし、輿水（1985）は、「了<sub>2</sub>」はことからの完成や新しい事態の発生を確認する語気を示すとしている。また守屋（1995）は、「了<sub>2</sub>」は状況が変化した、新事態が発生したことを確認したというムードを表すと述べている。

そのほか、変化と関係せず単に語気を表すと主張している学者もいる。劉他（2001）は「了<sub>2</sub>」の文法的意味について変化を表すことと別途に「了<sub>2</sub>」は確認の語気を表し、文を言い切ったり文章全体をまとめたりする働きがあると指摘している。盧（1996）は「了<sub>2</sub>」は事態の変化と確認の語気を示すとし、さらに「了<sub>2</sub>」は時間軸における流れを表さず、話し手の感情もしくは態度を示すと述べている（2004）。本稿も「了<sub>2</sub>」は変化と関係なく単純に話し手が事柄に対する確認の語気を示すことができると考える。事柄に対する確認の語気とは、文中に述べられたことや状況に対して確かにそうだという話し手の気持ちの表現形式であり、強調を表す方法の一つでもある。

語気を単純に表す「了」は初級レベルにおいては、一般的に文型の形で取り上げられる。例えば「太+Adj.+了（～すぎる）」や「Adj.+极了（すごく…）」、「Adj.+多了（～よりずいぶん…）」などが挙げられる。これらの文型における「了」は文型の必要な構成要素として扱われ、その働き自体には言及されないのが普通である。

『新实用汉语课本』も上記の文型に対する説明は文型全体の意味に留まり、「了」の働きについて触れていない。それは、初級レベルの学習者を混乱させないため、情報量を与えすぎないように取捨選択がされた結果であり、適切な方法でもある。ただし、準中級レベルから上記の文型に収まらない自由文が会話文に現れはじめており（例17）、適切な時期に、「了」は話し手の事柄に対する確認の語気を表す働きも持っていることを一つの項目として取り上げる価値がある。それもまた「了」がイコール過去形マークではないという学習者の理解を深めることになると思われる。

(18) 我收到的礼物最好了。            私がもらったプレゼントが最も良いんだ。

(18) は文脈によると、「変化を表す」場面がないとは言えないが、『新实用汉语课本』

の会話文の場合、状況に変化が生じた、または新事態が発生したと捉えられない。自分のもらったプレゼントが他の人のもらったものと比べて最もいいということは確かなことだという確認の語気を表している。また、事柄に対する確認の語気を表す「了」は、「太～了」や「～极了」、「～多了」のような文型に用いられる時は省略不可であるのに対して、自由文においては省略できる場合が多い。

#### 4. 初級及び準中級中国語学習における「了」の効果的な教授法についての提案

「了」の文法的意味は複雑なだけにその学習過程も長い。学習者が途中で投げ出さないように「了」の全体を見渡す教授法を確立する必要がある。本稿はこれまでの分析を踏まえて初級及び準中級中国語における「了」についての教授法を提案したい。

##### (1) 初級～準中級段階の学習者に「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」の言い方をしないこと

「了」の文法的意味に応じて「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」のように使い分ける教材が多い。本稿も第2節まで「了」を分析するため、「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」の言い方を取っているが、中国語をコミュニケーション手段として学ぶことを目的とする学習者の立場で考えると、それは学習者の習得に貢献するどころか、かえって混乱させてしまう恐れがある。特に文末における「了」が時には二つの「了」の合体である場合もあるため、学者の中でもどのように区分するか意見が分かれている。一方、「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」の言い方を取らなくても文法的意味によって文法形式が違ってくるため、分ける必要がないと言えよう。

##### (2) 「了」の原点であるキーワードが4つあることを常に学習者に示すこと

「了」の原点であるキーワードが、動作の実現、状況の変化、動作もしくは状況の継続及び確認の語気の四つであり、それぞれは「了」の基本的な文法的意味に対応している。教材や文法書によって確認の語気の一つの文法的意味として取り上げていない場合もあるが、本稿は準中級レベル以降であれば、学習者に提示すべきだと考える。また、初級レベルの中間学習段階にいる学習者への提示は動作の実現、状況の変化の二つに留まっても良い。

##### (3) 学習者が犯しやすい誤用の種類を知り、事前に予防策を講じること

第2節では、準中級学習者の作文における「了」に関連する誤用の種類をまとめ、その原因を分析した。教員が学習者の犯しやすい誤用を把握できていれば、適切な時に代表的な例文を挙げたり、練習問題を作成したりすることができる。また、「了」と直接的な関連性がないが、「了」を使うとよく間違われる学習項目、例えば連動式文の学習内容に、「了」と共起する時の注意点を追加して教えることが望ましい。

##### (4) 「温故知新」の考えを「了」の学習の全体に貫くこと

「了」の文法的意味が多いうえ、学習者が一定量の語彙を習得していない場合、適切な例文が挙げられないため、「了」の学習は何段階かに分けて導入されるのが一般的である。しかしながら、学習は前回のもとの間が空いた場合、学習者が前回で習ったことを忘れてたり、曖昧な記憶になったりするため、新しい内容の習得に支障を来す。したがって、「了」

の二段階目の学習から、新しい内容を教える前に今まで習った内容を復習しておくことが大切である。

例えば、3-2で取り上げた未来のある時点における動作の実現を表す働きについて、『新实用漢語課本』は一つの例（“明天下午我买了本子去吃饭”）を挙げて説明しているが、その課で習った文法項目と語彙の使い方を確認するための会話文に組み込まれていない。文法が分からなくてもいいが会話文を暗唱するだけで外国語が上達すると主張する人がいるように、会話文は外国語教材においてとても重要な役割を担っているため、会話文を音読することがとても有効な勉強法の一つであり、実際多くの学習者が音読の練習を自主学习に取り入れている。したがって、会話文に組み込まれていない学習項目は学習者の注目を得られず、じきに忘れられることが推測できる。練習によるインプットの回数が足りず、文法項目の定着度が低いことを防ぐため、教員はその後の「了」の学習過程において適切なタイミングを見計らって、学習者に「了」が含まれる文の音読などの方法を用いて「了」を応用する文を復習させることが大事である。

一方、教員は必ずしも初級から上級まで順次に教えていくとは限らず、今現在学習者に教えようとする「了」の内容が「了」の全体から見ればどの段階に位置しているかを把握することが大切である。他に学習すべき内容が多く、既習内容に時間を使うことをもたないと思わず、「温故知新」という言葉があるように既習内容を復習しながら「了」に対する理解を深めていくことが必要である。そのため復習の配分を考慮した授業計画を練ることも大事である。

## 終わりに

助詞「了」は、外国人学習者を対象にする中国語教育においては従来難関の一つである。本稿は準中級学習者の作文から「了」に関連する誤用例を数多く収集して分析し、その結果を用いて初級及び準中級中国語における「了」のより効果的な教授法を提案した。なお、本稿の研究対象である「了」の学習内容は主に初級・準中級向けであるが、「了」の原点となる文法的意味をカバーしている。そのため、本稿に「了」の文法的意味をすべて取り上げていないが、準中級レベル以降の学習内容も原点となる文法的意味に基づいており、学習者が初級と準中級の段階でしっかりと「了」の基礎を理解していれば、習得の難しさを軽減させることができると考える。今後この教授法を実際の教育現場に応用し、その効果を検証しながら改善を図り、教育現場に役立つものを継続的に提案していきたい。

ただし、今回の研究対象の作文に方向補語と共起する「了」の誤用が見られなかった。それは学習者が方向補語と「了」の共起を習得したと言うより、準中級レベルの学習者が中国語で自分の日常生活を綴るのに方向補語と「了」の共起の表現を使う場面がまだ少ないからだと考えられる。また、劉他（2001）は「了<sub>2</sub>」が確定の語気を表し、文を言い切ったり、または違うテーマの区切りをつけたりする働きがあると指摘しているように、今回の研究対象の作文に、単文としては問題がないが、日記の冒頭の一文の場合、文末に「了」が置かれたため、後続の同テーマの文との接続が不自然になった現象が確認されている。本稿は初級及び準中級中国語における「了」の教授に重点を置いているため、上記2点の実態、原因及び対策を今後の課題にしたい。

注

- (1) 「了<sub>1</sub>」は動詞の後に置く動態助詞だが、形容詞の後にも「了」が置かれることがあり、変化、状態の実現を表すと考える学者（朱, 1982; 劉ほか, 2001; 荒川, 2003）もいる。本稿では、「了<sub>1</sub>」は動詞の後に置かれるもので、形容詞の後に置かれる「了」は変化を表す「了<sub>2</sub>」であると考ええる。
- (2) 盧は「了<sub>1</sub>」を動態助詞、「了<sub>2</sub>」を文末助詞と呼ぶ。
- (3) 本校の中国語の履修科目のレベルの目安は以下のとおりである。

	中国語Ⅰ	中国語Ⅱ	中国語Ⅲ
学習時間	約77時間	約154時間	約231時間
学習語彙数	約371語	約889語	約1200語
学習段階	入門～初級	初級	準中級

- (4) この39人の学生の国籍は、それぞれ日本28人、韓国3人、インドネシア2人、タイ2人、ベトナム人4人である。また、非日本語話者全員は英語が堪能である。
- (5) 提出は基本三回分の日記をまとめて週に一回としていたが、試験がある週や中間休暇（クォーターブレイク）は一回に減らしたり、休ませたりするように調整していた。また、日記の内容はプライバシーに関する部分が書かれていれば必ず守秘義務を守ると約束した。なお、39人の学生は全員毎週提出していたわけでもない。
- (6) ここで言う教材内容の不足とは教材の編成が悪いという意味でない。新出文法を提示する時、学習者の関心点を新しい文法項目に向けさせる必要があるうえ、教科書の分量も考慮しなければならないため、すべての既習項目を新出文法に関連づけることが難しい。したがって、ここで言う教材内容の不足はある意味で不可避なことである。そのため、教員は「了」のような複雑な文法項目を教授する時、その全貌を掴み、どんな時に教材のみで避けられない不足をどの時点でどのようにフォローすればいいかを考える必要がある。本稿は『新实用漢語課本』を例に取っているが、日本国内で出版されている5冊の中国語教材（そのうち、初級レベルの教材は3冊、準中級レベルの教材は2冊である）の「了」の教授内容及び本稿が提起した「了」の習得と関連深い項目（結果補語、時量補語、連動式文、兼語文、動詞の重ね型）を概観し、それらの教材にも『新实用漢語課本』に見られた不足が同様に存在していることが分かった。したがって、本稿が提案した「了」に関する教授法は『新实用漢語課本』を使用している場合だけでなく、ほかの初・準中級レベルの中国語教材を使用している場合にも参考価値があると考ええる。
- (7) ケース①～④の日本語訳は『現代中国語文法総覧』（1996）から引用したものである。
- (8) 北京语言大学汉语语料库（北京語言大学中国語コーパス）の略称。
- (9) 「未発生の状態の持続」についてはまた稿を改めて詳しく記述したい。
- (10) 兼語文の場合は「让」の丁寧な言い方の「请」の場合に限る。また、言葉と言葉の組み合わせにより前の動詞の後にしか「了<sub>1</sub>」をつけられない場合もある。
- (11) 第1節と第2節で「了」を詳しく分析するため、便宜上「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」のように表記しているが、「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」は文における位置が違うため、教育現場でわざわざ

分ける必要がないと本稿は主張しており、第3節以降は「了<sub>1</sub>」と「了<sub>2</sub>」をまとめて「了」と表記する。

(12) 本稿に挙げた中国語の例文のうち出典が示されていないものは筆者による自作の文である。

## 参考文献

- 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』 東京：大修館書店
- 房玉清 (2008) 《实用汉语语法（第二次修订本）》 北京：北京语言大学出版社
- 郭春貴 (2001) 『誤用から学ぶ中国語—基礎から応用まで—』 東京：白帝社
- 何宝璋 (2003) 《对外汉语教学语法的方法问题点滴：以如何教表示完成的“了”为例》 国家汉办教学处 (编) 《对外汉语教学语法探索 首届国际对外汉语教学语法研讨会论文集》：228-241. 北京：中国社会科学出版社
- 木村英樹 (2017) 『中国語はじめての一步』 (新版) 東京：筑摩書房
- 輿水優 (1985) 『中国語の語法の話—中国語文法概論』 東京：光生館
- 刘珣 (2010) 《新实用汉语课本》 (第2版) 第1・2・3冊 北京：北京言語大学出版社
- 劉穎 (2002) 『2年生のコミュニケーション中国語 (教授用)』 東京：白水社
- 劉穎 (2014) 『1年生のコミュニケーション中国語 (教授用)』 東京：白水社
- 刘月华 (1992) 『中国語の表現と機能』 平松圭子・高橋弥守彦・永吉昭一郎 (訳) 東京：好文出版
- 刘月华・潘文娛・故粹 (1996) 『現代中国語文法総覧』 相原茂 (監訳) 片山博美・守屋宏則・平井和之 (訳) 東京：くろしお出版
- 刘月华・潘文娛・故粹 (2001) 《实用现代汉语语法》 (增订本) 北京：商务印书馆
- 卢福波 (1996) 《对外汉语教学实用语法》 北京：北京语言大学出版社
- 卢福波 (2004) 《对外汉语教学语法研究》 北京：北京语言大学出版社
- 吕叔湘 (1995) 《现代汉语八百词》 北京：商务印书馆
- 盧濤 (2006) 《汉语助词使用错误分析》 『広島外国語教育研究』 9:139-154.  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/120000874954>
- 三宅登之 (2012) 『中級中国語 読みとく文法』 東京：白水社
- 守屋宏則 (1993) 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』 東京：東方書店
- 南勇 (2014) 『チャレンジ！一年生の中国語』 東京：朝日出版社
- 杉村博文 (1994) 『中国語文法教室』 東京：大修館書店
- 王振宇 (2014) 《关于“了”的习得情况调查和教学策略》 《中国語教育》 12:69-87.
- 吴丽君他 (2005) 『中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—』 西川和男 (編訳) 大阪：関西大学出版部
- 荀恩东・饶高琦・肖晓悦・臧娇娇 (2016) 《大数据背景下BCC语料库的研制》 《语料库语言学》 3:93-118.
- 尹景春・竹島毅 (2010) 『中国語 つぎへの一步 (教授用)』 東京：白水社
- 尹景春・竹島毅 (2012) 『《最新2訂版》中国語はじめての一步』 東京：白水社
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》 北京：商务印书馆